

教育長 様

校番 37 庄原格致 高等学校長
(全日制 課程)**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和3年度 実施報告書****1 学校の教育目標等**

(1) 教育目標

「格物致知」を实践し、高い知性と豊かな感性を持ち、進んで地域や社会に貢献できる生徒を育成する。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

①【普通科】社会（世界）に関心を持ち、社会が抱える課題について、主体的にかつ協働的に解決に取り組み、その成果を適切に表現できる生徒

【医療・教職コース】医療や教職に関心を持ち、それらに関わる課題について、主体的にかつ協働的に解決に取り組み、その成果を適切に表現できる生徒

②将来の夢を持ち、その実現に向け現在の自分とその差を知り、その差を埋めるため幅広く学ぶとともに粘り強く努力できる生徒

③自他を尊重するとともに、困難に負けない強さやしなやかさを持っている生徒

(3) 学科等の特色

本校は今年度からすべての学年で普通科3クラスのうち1クラスは医療・教職コースとなっている。3年前に広島県内で初めて医療・教職コース（以降「コース」）が作られ、「コース」は将来医療職・教職を希望する生徒及び医療・教職から課題を見付け、探究していくこと希望する生徒を対象として、庄原赤十字病院や県立広島大学、広島大学との連携による協力によって、医療・教職の現状や課題について深く学んだり、実習等を行う「医療・教職演習」（以降「演習」）及び、3年間で自己の在り方・生き方に基づいてグループや個人で探究活動を行う「総合的な探究の時間」に特色を持っている。

また、令和3年度入学者からは、普通科においても、「コース」と同様に探究するテーマを「郷土・グローバル」、「理数探究」と設定し、国際交流、地域課題解決活動、理数分野での探究活動を行う「社会貢献演習」（以後「社会演習」）、及び、グループや個人で探究活動を行う「総合的な探究の時間」に特色を持っている。

普通科ではあるが、中山間地域で少子高齢化の問題が顕在化している地域をフィールドにした教育活動を展開し、そのことで地域に貢献するとともに、将来地域に担い牽引する人材の育成を目指して様々な取組に挑戦している。

2 研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

ア 教科の学習と総合的な探究の時間（以後「探究」）の関連を図り、教科の学習が「探究」に生かされるようにする。

イ 「演習」と「総合」の関連を図り、探究課題や探究内容がより社会の課題と関連付いた価値のあるものにする。

ウ 1人一台のパソコン導入に伴いデジタル・シティズンシップを育成するプログラムを「公共」及び総合的な探究の時間での導入を図る。

(2) 3年後の目指す学校の姿

ア 自分が所属する社会と社会で生起している問題に関心を持ち、それらについて、ICTをよりよく活用し、主体的にかつ協働的に解決に取り組み、その成果を適切に表現できる生徒（課題解決能力）。

イ 自らの生き方・在り方について深く考え、それに関連した将来の夢を持ち、その実現に向け現在の自分とその

差を知り、その差を埋めるため幅広く学ぶとともに粘り強く努力できる生徒（メタ認知能力）。
 ウ 自分と異なった文化や考え方等の違いや多様性を認め、それらを尊重するとともに、困難に負けない強さやしなやかさを持っている生徒（レジリエンス）。

(3) 令和3年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ①教科と「総合」との関連を示すカリキュラム・マップが作成されている。
- ②3年間を通した「総合」、進路指導、「演習」、学校行事等との関連付けを示す表が作成されている。
- ③学校として育成を目指す資質・能力について、長期的ルーブリック（仮）が作成され、それに基づいて評価を行い、評価結果を基に指導計画が改善されている。
- ④デジタル・シティズンシップを育成する視点を取り入れた「総合」のプログラムが作成され試行されている。

イ アウトカム（成果目標）

- ①生徒が「総合」において、教科での知識や技能を活用していると実感している生徒の割合が50%以上となっている。
- ②第1学年に所属する教員が、「総合」と「演習」、キャリア教育等が関連付けられていると実感している。
- ③各学年の「総合」において、各探究過程の学習活動が十分満足できると認められる（A段階）生徒の割合が25%以上となっている。④3年次における「総合」における論文の評価結果が十分満足できると判断される（A段階）生徒の割合が10%以上になっている。
- ⑤ICTを活用して考えを深めることの効果を肯定的にとらえる生徒が30%以上となっている。

(4) 令和3年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

総合的な探究の時間、「医療・教職演習」、「社会貢献演習」

イ カリキュラム開発の概要

（マクロレベル）

- ①教育目標の達成と、育てたい生徒像に向けた3年間の「総合」の流れを大きく構想した。
- ②3年間の「総合」流れは、キャリア教育の視点から生徒のキャリア発達に必要な内容との関連を図って作成した。
- ③3年間を6期に分けて、そのまとまりを基にテーマや単元を設定した。
- ④マスタールーブリック（第一次案）（以後「第一次案」）は①～③で作成した「総合」の流れに沿って各学年の目標に合わせて作成した。
- ⑤県が主催した運営委員会や校内で実施した実行委員会、探究活動推進委員会において「第一次案」に対する意見を聴取等して修正を行った。
- ⑥「第一次案」作成に教員を参画させるのではなく、「第一次案」活用によって教員への浸透を図るように考え、現行の「総合」の単元の成果を評価するルーブリックを「第一次案」を基に作成して評価する研修（教育センター河原指導主事の指導による）を実施するとともに、担当者により評価を行った。

（ミクロレベル）

- ⑦第1学年「総合」の単元作成の構想づくりを探究活動推進委員会で行い、設定した大きな流れに沿った内容とするとともに、現在の生徒の課題を克服するための単元として位置付けるとした。
- ⑧⑦の構想を基に、第1学年の「総合」は、i：三年間の総合的な探究の時間に流れに位置付けたものであること、ii：マスタールーブリックで示された資質・能力のうちのいずれかと関連付けを図ること、iii：生徒の現状や課題との関連（生徒の進路・キャリア発達上の課題、学年集団の抱える課題）付けたものとする、の3点を考慮して単元の作成を行った。

主な単元の流れは次のとおりである。

次	小単元名（時数）	学習活動
1	他者の「こわい」を、整理する。（2時間）	他者（教師）の「こわいこと」の話を聞き、グループごとにKJ法を用いて、それをカテゴリ化し、「こわい」を細分化する。
2	自身の「こわい」を整理し、一般化する。（4時間）（本時）	自分自身が抱えている「こわさ」を言語化し、それを整理・分類・定義づけすることで、「こわい」を一般化する。※本時は第2次の1・2時間目
3	「こわい」とどう向き合うか。（2時間）	「自身はこれから“こわい”とどう向き合っていくか」という問いに対し、意思決定を行い、これまでに整理・分析してきた「こわい」という概念について向き合い、まとめる。

⑨公開研究授業を12月13日に実施し、⑧で作成した単元計画と実際の授業及び単元作成方法について発表し、様々な意見をいただいた。

⑩第2学年、第3学年の単元づくりについても次のような取組を行った。

【第2学年】

第2学年では、実際の社会で生起している課題を見付け、それを解決する探究活動を予定している。そのため、学校設定教科・科目である「社会貢献演習」において、広島大学、庄原赤十字病院、庄原商工会議所、庄原ショッピングセンタージョイフル等の諸機関と連携し、講演やインタビュー、小学生冬休み教室、小学生向け健康啓発イベント、フィールドワーク、フィールドワークの集大成としてイベントを行う予定であった。

ジョイフルと連携した取組の各店舗の協力の基、生徒がイベント等を企画し実施する直前までできた（蔓延防止措置により延期し、3月中旬に実施予定）。小学生対象の夏休み教室は生徒が企画し夏休みの半日で実施することができた。貯骨啓発活動（骨粗しょう症予防活動）についても調査をしてまとめ啓発のためのイベントを実施予定である。

【第3学年】

第3学年では、2年生の時からテーマ設定において様々な先生や大学院生等から意見をもらう経験を通して、それぞれの興味・関心に基づき、独自性や意義のある研究テーマを決めて探究活動を行い、その成果を「論文」（研究報告書）にまとめた。

ウ 校内体制

探究活動推進委員会が研究活動推進の中核となり、全体の統括、進捗確認、及び「総合」び「演習」のカリキュラム編成を担当する。カリキュラムの実施及び評価については、今年度は第1学年会が担った（令和4年度は第1、第2学年会が、令和5年度は第1～第3学年会が担当する）。また、カリキュラム・マップの作成については教科主任会議が担当し、ICTを効果的に教育活動に取り入れて実施するプログラムについてはICT活用推進委員会が担当したまた、全職員がカリキュラム開発に参画する機会としてカリキュラム・マネジメント研修会を定期的に開催した。

今年度の研究推進に関わって、第1学年では普通科、コースや医療、教職に応じたカリキュラムの実施が難しく、探究活動推進委員会の構成と役割を明確にする必要がある。例えば、次年度では第2学年では普通科の「郷土・グローバル」類型、理数探究類型、コースでは医療類型、教職類型の担当者等を設定して「総合」と「演習」の充実を図る必要がある。

また、第2学年は「STEAM教育」の視点を取り入れてカリキュラムを編成することから、STEAM担当を、さらに、カリキュラム評価を客観的に定期的に行う評価担当を設置し、評価を計画的に実施し、その評価を基にカリキュラム改善を行っていく。

(5) 学習評価

今年度については、総合的な探究の時間において、各探究過程での学習活動で作成したレポートや発表原稿、プレゼンテーションやポスター発表による評価、及びその内容等を集積したポートフォリオによる評価を中心に、生徒の自己評価や相互評価や探究活動を支援していただいている大学教授及び大学院生や民間テストなどによる第三者評価を試みた。

本校のマスタールーブリックの格致力Ⅰの思考力は、本校の生徒の課題であり、カリキュラムにおいて事象を深く考察するための単元作成を行った（第1学年で作成し公開した単元）。併せて格致力Ⅰ（思考力）及び格致力Ⅲ（実践力）に関連する民間テスト（「ベネッセ「GPS-Academic」、第1学年12月実施）結果は次のとおりである。

- ①説得力のある主張やその根拠を提示できる（7.6%）、②適切な主張や根拠を提示できる（54.3%）
- ③何らかの主張や根拠を提示できる（36.2%）、④無回答または評価外（1.9%）

(6) カリキュラム評価

カリキュラム評価は、生徒の資質・能力がどの程度身に付いているかによって行った。量的及び質的に評価した結果は次の表のとおりで、量的はGPS、ルーブリック評価割合、質的は各学年会や探究活動委員会で出された意見をまとめた。

マスタールーブリック	量的（A段階=十分満足できる）	質的
格致力Ⅰ（思考力）	【GPS】適切な主張や根拠を提示できる 55% 【他者評価】自分の考えや経験に関連付けてその理由を説明できる（A段階 83%）	与えられたテーマを自分たちなりに捉えることができていない。
格致力Ⅱ（課題発見解決能力）	【生徒アンケート】各探究過程の学習活動（A段階 25%） 【生徒アンケート】将来の目標を適切に描いている生徒の割合 74.8%	

格致力Ⅲ（実践力）	【他者評価】他の生徒と協働して学習活動を行いグループの意見とするために建設的な意見をだしたりできる。（A段階 93.5%）	12月ではICT機器に頼らず生徒が積極的に協力し合っていた。
格致力Ⅲ（実践力） ※デジタル・シティズンシップとの関連	【生徒アンケート】ICTを活用して考えを深めることの効果を肯定的にとらえる生徒の割合70%	
格致力Ⅳ（メタ認知能力）	【他者評価】考え方の変化や疑問等に気付くことができる（A段階 22.7%）	次の探究に繋がる程度までの気付きや疑問点までは持つことができていない。

第1学年のカリキュラムに対する評価としては、思考力やメタ認知能力の課題を整理してカリキュラムを改善する。

【指導体制】

今年度の指導体制は次のとおりである。

学年	探究活動推進委員	総合担当人数の予定
第1学年	2	7（学年主任，担任）※必要に応じて学年会
第2学年	2	8（学年主任，担任，副担任）
第3学年	2	8（第3学年会，他学年所属を含む） ①医療，体育，②家庭，地域，地理等，③経済，芸術，文化等，④化学，物理，生物，自然，⑤教育，言語，心理の5講座に分けて実施

探究活動推進委員会を中心に指導体制を作り、各学年の進捗管理等を行ったが、実際の指導レベルでは各学年の探究活動推進委員任せになり、準備等の負担が集中する実態があった。各学年での推進委員が2人（後は学年主任）であったため、次年度は第2学年には4類型ごとの担当者を配置するなどして類型ごとの探究活動の充実を図る。

また、授業担当者についても、今年度は担任・副担任を中心だったが、第2学年のフィールドワークや第3学年の論文作成には、分野ごとの担当者を割り振りして、学校全体として取り組む体制を整える必要がある。

3 令和3年度の成果及び課題

(1) 成果

- ・3年間を通した「総合」、進路指導、「演習」、学校行事等との関連付けを示す表を作成し共有した。
- ・次年度シラバスで教科と「総合」の関連を示した。
- ・学校として育成を目指す資質・能力と教科で育成する資質・能力の関係、考え方を整理した。
- ・長期的ルーブリックに当たる「マスタールーブリック」を作成し、改善が進め、第3版を作成した。
- ・マスタールーブリックに基づいた単元末の評価を行い、カリキュラムの振り返り、改善に活用した。・マスタールーブリックで示した資質・能力と教科指導の関係を整理し、11月に国語、地理歴史の公開研究授業でその考え方を示した。
- ・マスタールーブリックを作成する手順と改訂の方法について示し、総合の3年間の流れを作り、それを基にマスタールーブリックを作成するという考え方を整理した。
- ・マスタールーブリックのブラッシュアップを行う本校独自の方法を整理した。マスタールーブリックに基づいた単元作成と、生徒の実態に基づいて作成した単元によるマスタールーブリックの修正という独自の考え方を整理した。
- ・マスタールーブリック作成に多くの職員を参画させるのではなく、単元の成果を評価するためのルーブリックづくりにマスタールーブリックを活用させることによりマスタールーブリックの浸透を図る方法を提案し実施した。
- ・デジタルシティズンシップを育成するにあたり、公共での単元作成の他、特別活動、総合の内容との関連付けを行っている。
- ・本校独自の「総合」の単元作成の考え方を示し、その考え方に基づいた単元を作成し、12月の公開研究授業で発表した。
- ・「総合」により、約70%の生徒が知識や能力を身につけ、様々な人間や考え方を知ることができたと回答した。
- ・約90%の生徒が探究の時間の授業を通して自分自身の進路について考える機会になったと回答した。
- ・70%の生徒が各自のクロムブックを活用して調べ学習を行い、グループで協力・批評してパワーポイントを作成することで効果を実感していると回答した。
- ・第2学年で実施する社会の課題を解決する探究活動を地元のショッピングセンターの協力によって実施できた。
- ・第3学年の内容である個人探究を実施し、後輩生徒の目標となる十分満足できるレベルの論文（研究レポート）が作成され、学校図書館に配架される予定である。
- ・第3学年生徒の一部の生徒は「総合」で研究した内容を活かして、大学入試の推薦等でのアピールできた生徒が複数名（7名）いた。

(2) 課題

- ・学校としての取組とするために探究活動推進委員会の構成を検討するとともに、内容を周知する方法について全体研修を開催や「探究委員会だより」等も発行するなどした工夫を行う必要がある。
- ・学校としてカリキュラムの有効性を評価するためには、評価が重要である。評価に特化した業務を行う担当を設置し、できるだけ客観的及び計画的に評価を行う。
- ・探究活動推進委員会の担当者だけの負担とならないように、類型ごとの担当者を置くなどして、学年会所属職員の意識の向上を図る。
- ・STEAM教育の導入を予定しているため、外部対応の業務の増加に対応するよう管理職を含めて協力体制を整える必要がある。
- ・3年生の論文作成では、当初設定したレベルである十分満足できると判断できる（A段階）生徒の割合は、10%を超えたが、テーマが自分の在り方生き方と結び付ける点や探究過程の分析や考察のレベルに課題が見られた。
- ・民間テストなどによる第三者評価の結果、約55%の生徒は主張や根拠を示すことができているが、説得力のある論理を組み立て、相手を納得させる力は身に付いていないという課題が分かった。そのことは、本校のマスターループブリックの1年生の目標はほぼ達成しているが、多面的・多角的に考察し、その結果を適切に表現する力に課題があることが分かった。

4 令和4年度の目標及び取組内容

(1) 令和4年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ①教科と「総合」間の関連を示すカリキュラム・マップが改善され、関連を意識した授業が行われている。
- ②3年間を通した「総合」、進路指導、「演習」及び学校行事等との関連付けがさらに図られ改善されている。
- ③生徒の資質・能力について、マスターループブリック（第3版）に基づいて評価を行い、評価結果を基に指導計画が改善されている。必要であればマスターループブリック（第3版）が改善されている。
- ④デジタル・シティズンシップを育成する視点を取り入れた「総合」のプログラムが改善されて実施されている。
- ⑤（未定）STEAM教育の視点を取り入れた第2学年のカリキュラムが編成され、実施されている。

イ アウトカム（成果目標）

- ①生徒が「総合」の活動において、教科での知識や技能を活用していると実感している生徒の割合が70%以上となっている。
- ②第1学年及び第2学年に所属する教員が、「総合」と「演習」、キャリア教育等が関連付けられていると実感している。
- ③各学年の「総合」において、各探究過程の学習活動が十分満足できると認められる（A段階）生徒の割合が40%以上となっている。
- ④3年次における「総合」における論文の評価結果が十分満足できると判断される（A段階）生徒の割合が20%以上となっている。
- ⑤ICTを活用して考えを深めることの効果を肯定的にとらえる生徒が50%以上となっている。

(2) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

対象 第2学年「総合的な探究の時間」（併せて「演習」）

カリキュラムの構想

今年度第2学年が実施した現行カリキュラムを改善し、地域の庄原の未来を格致生が企画し、実現していくカリキュラムを作成する。

- ① 地域を知ろう 庄原って、県北ってどんなところか（良さをPR）【数学、国語、地理歴史、公民、美術、情報、演習との関連を図る】

各グループでテーマを設定し、地元についての情報収集を行いその結果を基に地元の紹介パンフレット作製又は動画作成を行う。その際にアピールするためのポイントを探したり、専門家の人や当事者等への聞き取りを行ったりするなどの体験を行わせるとともに、表現を行う際の留意点（目的や対象に合った表現方法や著作権、肖像権など人権等）についても学ぶ。

- ② 自分たちの意見や考えを政策に反映するにはどうすればよいか。（主権者教育）【公民、演習】

住民の意見を反映させる仕組みを探してみよう。実際の政策がどのように作られているかを調べてみよう。議会は何をすることか。（どんな政策がどのようにして実行に移されているか、なぜその政策が選ばれたのか、庄原市の政策から考えてみよう。）

③ 庄原市の抱える課題は何だろうか。【地歴、公民、演習】

地域を観察する視点として、a:データによる分析(比較,多面的,感覚的),b:地域経済循環,地域活性化,住民の幸福等からの分析,c:ヒアリング(関係機関等へのヒアリング)による分析という地域を観察するための3つの手法で行う。

データに基づいた分析を通して地域課題の原因や背景を探る。その際探究の方法や調査の進め方を実際に学ぶとともに、専門家等への依頼や調査の準備,調査,報告書の作成などを体験する。

また、自分たちなりの課題を設定するために、探究の視点(郷土,グローバル,環境,産業,医療,教育)を与えて課題を明らかにする。

④ 課題解決の提案を考えよう。【国語】

③で行った観察を基に、そこで明らかになった事実を基に、解決するための仮説を設定する。仮説を設定する手法を学び、その手法に基づいて解決策の仮説を提案・実施できるようにする。

⑤ 実現可能性のある提案をしよう。(実現可能性はどのようにして高めるか)【国語、演習】

提案シートを作成し、関係者(関係者等)へ提案し、その提案に対して指摘してもらって提案をより現実的なものに変え、実践を行う。

⑥ 提案を伝えたり、実施したりする。【国語、情報、演習】

イ 校内体制

探究活動推進委員会が研究活動推進の中核となり、全体の統括,進捗確認,及び総合的な探究の時間及び「演習」のカリキュラム編成やボランティア同好会の活動内容の検討を担当する。カリキュラム・マップの作成については教科主任会議が担当し、ICTを効果的に教育活動に取り入れて実施するプログラム(digital citizenship教育)についてはICT活用推進委員会が担当する。また、全職員がカリキュラム開発に参画する機会としてカリキュラム・マネジメント研修会を定期的を開催する。

今年度の反省を受け、研究推進に関わって、各学年の探究活動推進委員,授業担当者を増やし、次のとおりとする。

学年	探究活動推進委員	総合担当人数の予定
第1学年	3	7(学年主任,担任)※必要に応じて学年会
第2学年	4	8(学年主任,担任,副担任)※適宜関係教科が協力する。
第3学年	3 ※一人は評価担当	12(第3学年会,他学年所属を含む) ①医療,保健,体育,②家庭,地域,観光,③経済,地域創生,④芸術,文化等,⑤科学,数学,⑥教育,言語,心理,⑥国際,その他の6講座に分けて実施を予定している。